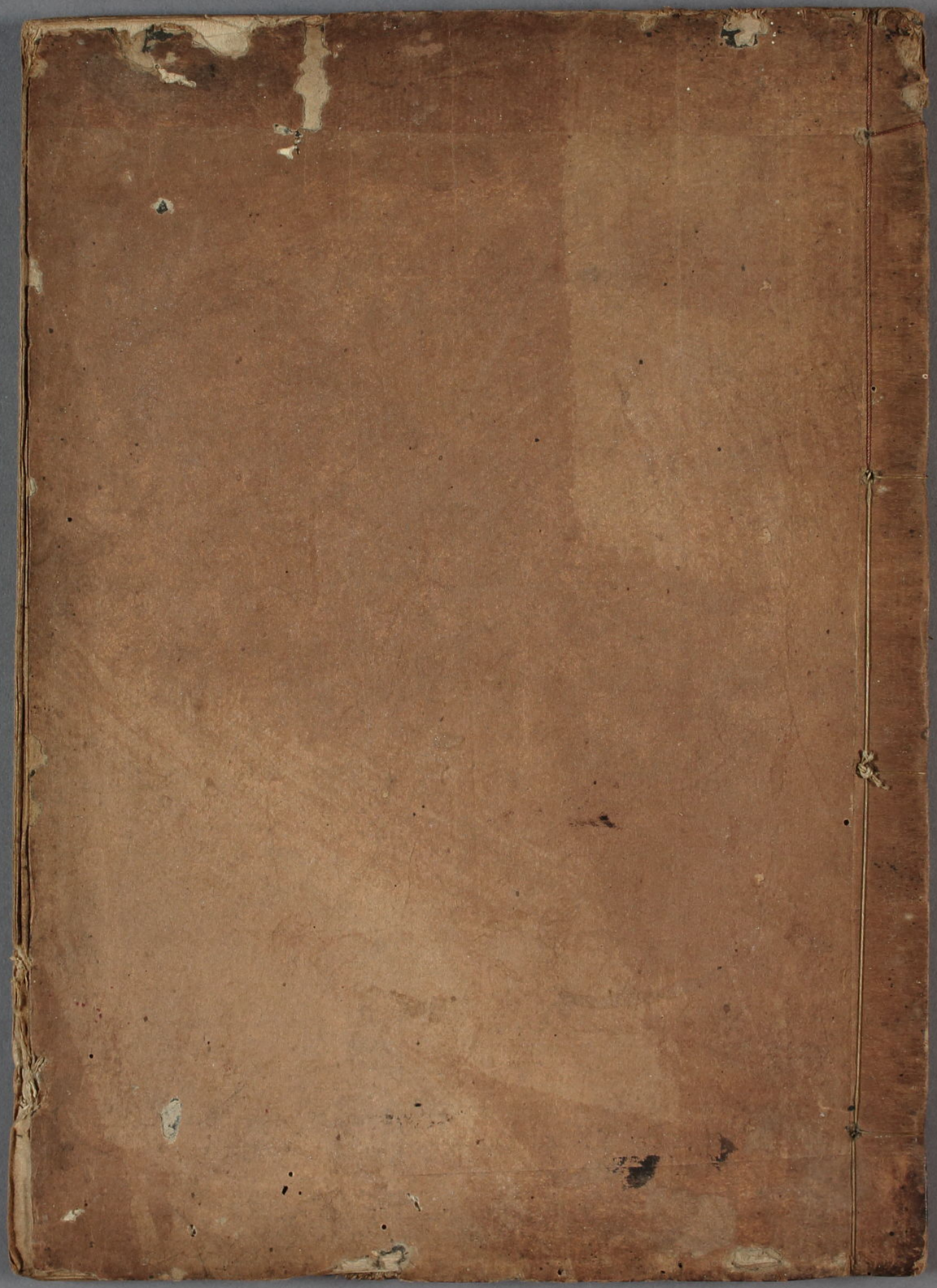

西行杜子美を誰をも
猶なほ
猶形ちて一家のみ
を形容ハ芭蕉
おもひ形ハ猶

東に英てて枝の孫麿
をつ出ん人こもあ
ひこ枝と此も出てて
我出家なれかい美
このこと出家なれ

於もてをる笹りは
紅をこみと合と
こまま稚い御枝
もこかに英とく玄来
許六かよ出家
六月同巻も御枝

[illegible]也

寛政庚申[illegible]

洛陽　竹巣月居序

賜[illegible]氏其角書

[illegible]

のるとまもなきしは風俗にうつれにしたくふ猶ゆきた天下人ハ
往にふしうつしにと云ことなしあやし一時の流り
にあくさられとのはむかしはそのにさ口質のとききふもふのにて
くるの俗目流りの物にはやりて正風を何れもとにて何に
ふしとおきて於いてもおのれをうち甫子がちらの於け
のふしとにはいさきやうさのふあしけれ且つ女摩一品なるとの
ふしと何れのことはさることのとしにてあけくとのするにか
らのさとくおのれは貧見に臭つきてたたとこのまるにか
をとり極めきにいに何にしも自於よりかしきもちて書に
急ちに言つ志れしとも其の詠草ともあわれふるの
のりに於ていへ十ままふる奇妙なる変る風流の句
りいらくえるは集来其のおもう世まをとしも流を
さとに其角子は世上の宗匠芭蕉の高弟の妙跡

句とぞいへしいしき俳諧のは其生の迷ひ日々の恨をそれとに
其角の云汝か言葉をしらすと於いて其を天下りしめさる
ものはまた川ならむとすれは人をおかしく
而もしかもあり旧姿とて何にもかなめさるは無理し
しるの那の流りにちまちもなきをあわれ老少ともに
せる人は有志人の風に致せしことを頭とる
かけきは高きり跡もあれん事とはならぬとおもひ
の風雅のまことをならひの志たてて流りのおもひ
しきもきよく又相ならけ世の人のあたくなき事にて
ものの言に之に於いて志れは之川て風流にあり
みれはあると以後へ代々の宗師の根をおもくしれは
や流行をも何にしてもいふて今下ともなるかいにもかなと

夜ちらへ見し先のの筆をありしく帰りふへり水雲の吉き
くさとしまうてさらさらいはんとするに操を生しらう
今日流生の為に古格をあらためさらにいふなるなきを
ありしとてゆりちはかならす角をもつて剱乃菓刀
にかくへしとせんかな翁乃日此言傾むて角が今
此今日乃風ありにおさへいしとくり来また花そくの
風流をさとしいひこころ知るへて去
来の日さるをおさへいへと給ふとし同あい歌のことと
はふかき道をおあらなくせりうすてむなし西を旅乃
春秋をしたとひしも我来雲て衰のうらみといはれむと
とふ世とゆるをまつ松霜後のくさひとことふりくさり
おのずから書してまたにおそる先生はいかにせむとて也

其角先生 机右下　去来拝

贈其角先生書　去来
許六

千歳不易一時流行のねかいはるとつくさるにそ子も論
せらるといへとも仲て丈角に笑くと今しは右かまへさる
ならひ生得物に名ことし志ある人の厚きと去りし正本
正蕉の詞なくかはりつくらふことをもとり若葉集の序
とは是そそを知らぬ出かけり世ともす三神
なとかけて相撲を番みかはしに立ちまり諸集乃中
目うら句なりれ大く番まをかけしおそらくは才
とそらへはないもや亡師の夕り事ましてひとし
くもの和に論せらるいかに世つくち中けれあやまりとかへん

[illegible]年不審ながら[illegible]紀の後世[illegible]年の白骨[illegible]
いふ人生年湖南京[illegible]不り事[illegible]りの二[illegible]
[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]て[illegible]の[illegible]
[illegible]ん[illegible]年[illegible]ふ[illegible]
[illegible]ちちちちひと[illegible]
一句のふ[illegible]ぬはかりて[illegible]
[illegible]の類[illegible]
[illegible]ん一句[illegible]
[illegible]
[illegible]四十三[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]あ[illegible]只[illegible]ふ[illegible]
[illegible]ふ[illegible]の二[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]西[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]世界[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

さく治りけりとかくとかとふる道りおのりくあからとさし
世滅はの今日に行く作とせらく流りて高と
貴りしよりよき句とさらくとらく上手乃名人とも
はしまやア読ぞ才の中ふ古今の句ともさとさとかさなし
世のゝ前滅は才の中ふ採乾佩然の域何も茶乃酒
盛の一千り加りて流派漂泊が夜ニ夜の頭陀を体なれ
まてまふきまさやなやも出ぬゝ才の叔ふ一つもなしけまする
何事れとのともみてふ集作者一派をなさすふとて
よろしといへとも却て一派乃恥辱他への嘲りとなり
好ゝ躯りくくるんとる才眉を志るん唇を閉ゐふとくゝ之
まゝ集作りて善悪乃沙汰ふおよふいかゝ時撰集東乃方
栖之作者日の集ふあて字まれ竹花ふの相遠随たらひのあ地

松我ふるふいとはおもしもつめ化いりくり編者高才
古来今乃何やあらとよし何ら人も及ふ所へかゝくく木枝雪
或乃名ここ十時とゝして世とゝこの以沢才ふうらしる集
を作らんるも悲しむゝむれと云ふ
ことを防るもゝとふまは何りゝや惟然坊と多くその一派の能然とと
弘むるに益なしといへとも却て当首を引乃二流ののしりか
たからんかゝるとてのゝ嘲し出てし一生真乃能然をとりふ
ものむかるとてもし甚しの内ふ入てゝ世上乃人を迷りし大織
成りしゆ事ることさく外集もとかとかせ世上ふ恥辱を晒すと
あ乃惟然ふかきうし浄瑠璃乃情けりて俳のあゝと作り金山
談合の席ふ名月乃句をあまたゝとりて柿ふかりとなら
ともさりれ大いに同し他門せしふ本性をゝ人重俗乃昏抓

さきし仰ハ罪をむしのれん即徊老未練ものとしとかと
一派の俳諧ハ於いて大敵とうけて一方城をかりしも大軍

俳諧に於いて大敵とうけて一方城をかりしも大軍
成ありしきえけ一番にうち死せんとことさらに志し
許石のごとしなり同じの輩とも胡乱と不顔東と
つまりしてそれをおさすきの雑談隠容の交は太ふ
おさもしく緒いの取りきし隠しとつべしおさなく
なりしを大事ともなきんとやもくハいる事やと是をはなきて侍りし
を合せや蕉門をとりて大敵と始め来給へ

許六拝

去来先生
梧右下

落柿舎去来

答許六問難辯

湖東の許六ハ雅兄其角ハおくる文をとりみるに紀
雅をきし日比ハあくらまさしくに風雅の人く

やの音作中にあとゝ論ずるしあらふものはいくらくし
志はいせ微言をもつてこれを弁じ是非を正されたく雅兄
まつしらく
○来書曰手来不可一時作りのあいたとやつく平子より
本性を論せらるゝ事甚尤其角ハ嵐雪をとらへしく之ニ去る
かけ乾俗に生得にそのかたるしえるせしもしく人の序
しめと志し之を返答の手とそもすくてかへつゝ辞とも
とり若葉集の序とし是をいやしかと志らぬ在なり
△去来曰かの雑雅兄の序をよみし又おりふしまかりいるた
まことを論ずるものと弁じて紀さり益なし志りを望
ことなのこ○来書曰志りふかくいとも三神をうけて
相撲とも元よう明しいひて又諸子の身のうたとゝのう

△去来曰雅兄の言ハ伝きてしかし也又きはり同し文
中ゟ分たしくその罪しからは事なきハ○来書曰性ふ賤
こと侍りて人を召し先生の諸集のうち目立る句を以て大方
平子もしく△去来曰雅兄の云感せられしめ古ふ角の
好む句多しとすや也先生俳諧ふ謙しはいしくる
不入ふ角ハ句十ふしく其人にてもの一二ちとの余ハ世
有平ハの句となれ信也紀集ふ衛撰集去ず句とさき取り
かゝ書をるのうち雅兄の句外独角ゟ句の三
その俳にもあしこれをてはしたく○来書曰ふかふ
又之等とゞくハ△去来曰これなきとくハ雅兄の遊録せん
の角ハ女の大なるとを以て評せたるかしからと頭せふいくし
かん角の句の中しすをとりて評せハ某ふかくと勝
ホつれ世しいゝましや諸日の人をや也あるまつてせしといふ

ふうこれ国つ人の生たる
神の一人也○未書曰ちんは
ちいかんと論せまく
とくんや△玄素曰ちんは
南方の産文ふかく世にこれ
雅兄弥の学に力をつくす
東りとする者ありて又十里を
ひとつとせ弥をもとに南北の
ようにこれ著書素曰
ともをもって他神ふ人
世玄素曰吾より言を又一理
おもうこれ古人多くして
神ふ人和の如き
俳諧の神ふ人
人業
又一理あり

わ一の中の世南量少て曰吾子こ言を
入る人と成中の世玄素曰吾こ言を又一理あり二言こ
味もつて出るとも共り先ものとりの古人
ふはすこれとこ
とこうこれ○未書曰不富ものと近代後
法の学の句に集る出さ
志ひこの工夫をはこへ
日こ世ものこ出されのこふ
無の血脈をこうこ
かこれ又曰学問乃変
世こと又近代乃ちを
とも今乃世りあ
俳諧の神ふ人
人業

世のしちゃん北ふ吉撰曰一世乃くもふあ道乃句三五句しん
人ハ俳者也十句ふ於よそん人ハ名人也又是皆人ゝ乃句集
主にかなふものあつまりてゐらんとしまふものを撰の
小文と号ましと律ふたり友にけつゝ弟ら名しての句と人集まる
せかしりきとの無きと弟曰家る句撰ふ人無き句いふことを奇也
以乃日俳の分乃ことをなして古きこ家こと我乃集撰こと
乃んとなる句もる物ハ俳諧せんつむことりておもあり
あそこふ秀逸をいふんハ世ふ中れせんと大上秘と之か
のはた人乃句ととりしまはらや桐あふるまる乃當こみ和を存
乃當業何ことば門人ちよりわれんまたいひとも自ら
元りて撰りおのれの位をしらけみ人を争ひ何つ半途
ともそみつらかふてほし世に今れ何乃弟ふ敵し心ち

何ら此ハ秀逸なる句の何ら此ハ古の句我も不及或ハ風雅ニ俳等一者士
ふらまし古れ等の古こゝなしとせしれ古れを
おこりて古りにと此の句りせをまもてはなし乃たまひ
あそ古れと同つの句り合せもつまらて辞をうれまてに
切ることその當の手りし道せてる古文ことこれをゆうし秀逸
傳れかるさ古文ことに知れと○弟當日真平翁簡京坊の門
界不易流りの二つありし迷ひ流れもいはりては何ことれ
真乃俳諧ととそかしてかれきよもにんらん○去来曰
古乃語雅兄乃奥自らりり何こと其よまほらふ於る
てさのれと辯古○未去曰弟あなし同つ弟ふ句と論
まるふ二去ゑの續さ法とはされいふしてこいを此ち
乃ふさ志はともんとぬハかつるぬ句とせほ古れ私をさもこ

琴柱に膠するの類ひなからんや△去来が此論雅兄の云の
ことく大蛇の影を書給ふの類なりおもしろきさびし
時は風雅の大切にしてふるゝ無の類すれとも他の作者
を句さびし腸を得しからんはさんためのさへぬとなり
△白雪はいつのまき作者ともん我さかれ何かまとそれ
といひまてんやまれをむねにふるゝ言んはせきくもまき
何事をまきりはしめまつとそんならはきれいとひきてん
るてるとなれかしのごく論せしまゝいたく口をはせやんかたきん
いし文法の人の句を見てはなま分とも懸て
ほとしとにんる又初心の作者はさひまほとしきみ谷ならり
とく句のつゝかへて其外口にとて新たりろうし
まれ先師の此しかれる又星目らさひ無面にとらる此君の

保侍なりとは何らはひとさへき句は奥之角を
と構ちる無句を別ちて出てうちにあかをして知あまあ
いはまめや言語筆頭なとをつくる分ちらかはん論ずる事
をといてはいは句のまはり何をしたひる句の降旨帰り
何とも出しとも輙句もとかしとも発句をは得ましんと見すへか
しての絹本とりにとも輙句は何をしまりを無と更めり
西鶴が鼻をとむきへたりつゝなりける赤栴の花のこゝかりし茶菓と
めでたき柱のけかれをりれんと昔かたしにあもとこち分合
人位せんや○来云日一句ふつらなりとて其人の作にて有も
さひし日にも自から得てあるなる句をしてとく△去来日雅兄
乃をさまらに付けて木地を俳諧にして句もいとむしれ

はかなき句ふるき人々といへども先師の句をとりわけ厳
かくこその情やさしく何を深くせまり草花かゝりけり
縦数句あるを何れせまりたるぬるとのまへ潤しき
物自なると千変万化すといふ事もさびしおもき
句はなし雅兄先師の句ことに用てかんじ玉へさびの縁
細かなのさびしきと俳諧のなからさしてを濃也米書白頭
年ありし　四十二更年いかゞおとろへ侍れども
まらん　△去来曰雅兄の言もっともなれども雅兄
老乃名と得しめ此ゝの句りはかりとはなれ
せんとふ風情雅兄の作にて小心にて句の情
ちともらん人をうつしせしむ　○来云曰志れども花の
来るはさてのかはりたる句おのつからもしかりてけし

△去来曰雅兄のこと感深さも尤にはあれども
ものハ先師の人々の雅兄の心を以て風雅何にても去るとを
ともみも変切なりなどとかゝる変何かの法は中なれ
いふは甚だ甚しいとも甚諸弟子及人老を
論するまでに先師に多くの心ありて何にても
を持するもの一人をとふ多くは出たるものなる人出雅兄等と
えりてかんの人の人の生りと申ると何人に
いかにしても天の古人格言
まるへ　○来云曰てふとたちとも真
の詠みし何ぞし　△去来曰雅兄の的中せしとかゝる
て見るを句を縁見るとかりしもせん強てきてを共と
古人を破る道ある句のともなんてふるを御る作るま哉

用ひ初ふと文岡日の海に何る風 ○来云曰只一句の深ふ
ら以従ち律るもの乏からねし △去来曰古乃翁雅兄と思
はそのむかし宗鑑貞徳より以来数人名高き風
以れ非雅ならむとせしもし宗因とち
りれるを貞徳をしてを出し沙翁起て伝続七百韻
およふ先達多ふおよぶもの卯雲生して俳韻れ
其の日々て卯雲の出て旨ハ撥蕃りしもぬれぬ撥
蕃ら我儀ふ様れすらお其の用様ふまる古ハと仏
先達の一時流行の句と云にも用捨し不少ふ新句
古れをとりて千歳ふ易へ呉と記せる志れも傑
謝沈乃まうふるれ世んをあれまつ人今なしとせん
○来云曰ふ至流行のあり ふもぬれせどらハ云か

曾て短句もうかまれ句作りもいてきを以ぬ不易の句
せんと以爲ら作者湘南の俳諧ちう △去来曰古の長うた
めて湘南の人こそ風雅を言ふ也 今思ふとる趣の
ふてきれ合と古れを御ふ初めの時の風と初ふ事ハ異せん
にかれハ短句に句作りて前後と論まへ句りの新味
いてきれハ感偶まうとの其短句出のつくまふ若安まうなを
先短句もと案まて短句せりしいとうて句作りもと極むまで句也
有られる事ハ我ハ新古の風出来る其の古風ちうとのハ戦危
も探り捨てさし新風ふ赴ひほんとなと新風せりしいより
て句を改めの上で流行を極むれ事ハ短句乃後句乃新
新をいまんの古れ平生の案頭をもるまま又不易ハ一変せたら不洋て
庵んぞまとかし存り 流行のもと切りし極む也ふ是て

平生のたしなみもつとも第一也乃句をも案しおかるゝあらハ書写
のさたにしのみ未乱ハ別と心得て句をさためと旧法も
風体をもなし物ハうるさき平生の句案ハ未た旧派の新風
と出る句何にんとも出すに不易流行を開かるゝ
心得あらんまゝ不易流行にもわたりて案するなり也
あらて句ハ成へしとふ式ハ奉賀追悼貴人義士の事なくハ
の類もこゝろをもちゐすして不易流行をかねて句案さるゝと云ふ
ほ流ハ若題なとあらハ他人の人ハ不対して当流とはの心
にこそハ新風にしうつらんもの懐古の心をかるゝ流も
の句をもて心得るハ不案をたて又ハ俳諧の一道実ハ先務
造化の日夜にかハりて日ましにうつる後流も在るをしらし
り来りて不易の句をとたのしせしと心得させ給ふへし

也何とのゝあまりに旅木の心のまゝにいれてあり人と命して
案なかの事もあらんは何とも吟なる句会興ある事しても流れの
句をしても見せんふりなの句をしてさせんと云事をいひかれ
まことよりハとりて乃句をもゆへ句乃趣拙と未来ハ賢
愚と時日とに案してもあたみ乃おもしろきといふ事ハ句会
何の風をもすまん年々かハりて出する事ハ雑兵の俳諧ハ仁義実
人しらすしらんや梁をもつかハす句案にいたるまて其程式ハ出来
まことにきれを掃にうれを深と新風をとおもひまハれ出
いふかたてハ心よりおもしろきものを若雑兵されとしも
ワれともなく雑兵ハ本田深ハちまき人のおほくいとならせとも
於二度のの稽のきしてもる人心のもの乃人を以てすとしせん
しれもされ侍てハ賢愚一人のうちふかして古人を一口にいひなし

○孫云曰、[illegible]十体あり[illegible]西行[illegible]十体と綴れり
[illegible]夏[illegible]十体のうち[illegible]時
[illegible]何体の[illegible]
[illegible]△吉来曰、[illegible]結雅兄の[illegible]
[illegible]十体[illegible]
[illegible]古今[illegible]十体[illegible]
[illegible]夏の風[illegible]人
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]雅兄の論の清[illegible]世せ[illegible]
[illegible]ん○朱云曰[illegible]世の
[illegible]易[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

○朱曰[illegible]

△去来曰雑兄[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○朱曰[illegible]

△去来曰[illegible]

[illegible]

去曰[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○東山曰集花て善悪の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一言ともいはず流れに任せ[illegible]
流れをしらず[illegible]
[illegible]人評[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]人[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

△玄朱曰雜兄乃言葉[illegible]
[illegible]故[illegible]
[illegible]今自[illegible]十月の[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

新京の風を吹き込ふ風と共に西の方の風と
しばらく拾ふ所の風と共に
京の方の風と共に
紙の風世を吹きいたして
うつり出る風後世の風と
のを風いたて所の
きりして枝をかすめ新を根りして京を
の風と共に其体相続して
ぬるを世をかすめ今日の風
まふの風と共に今日の風
を人の風と
明日の風の
枝を

不昌の風の新を
おとづる時
全く芭蕉風のうちの
の百首の返書より不昌の風
して俳諧和歌の一斉
をとして小町と
を落る羽根と
歌八代集をおして
文をもちきれ
りはとて不
しひをうれ
かをる
一理なる
とこの風と
体なる〇十章
の百首の
俳諧
と共
を
西の
唱
年の
神代の
時の
十体
山
の
俳諧
の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]年の三集八[illegible]
四合を境乃人[illegible]の坊[illegible]
[illegible]
[illegible]人の後見[illegible]
き物も○廿八章四[illegible]
[illegible]八[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

句を作るに古人の体を以て
桃青と名を称し侍りしより
俳諧の道古人を慕ふ事なかりし時
世に人丸と申す者有り
交歌を作て俳諧の新風を
て二三年其の句を
俳諧を作る時
宮歌枕とその後
容世に
合四五年
自ら交歌
て大事と求
て日ごろ

論ずるに我が国の一天下
名人ありと雖
なる時
と一
仮名
人の句
十七文字の
集を
世の
俳諧
内大臣
集

二三年
と今日に
序
序
の出板
小深
故山に
蕉庵
桃澤

俳諧
句
序
序
序

[illegible]

句初めて見る　七月廿四日岩倉の宴にて風を詠ず

雨雲もなしなしなる　大井川

十五夜も小稲刈りなる秋の風

かりかりの月の出の遅き時雨哉

家毎へ指口立てるほとゝぎす

[illegible]

師兄終て云く鈴中うつの山の句大きに素直なる句

清く爽快の句なり　敦盛風　大井川の句

[illegible]の時雨か家毎に雨を生じ再

笠を返し宮津の山の句能く成程と

此句[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]脈を一方に[illegible]て[illegible]脈と[illegible]て[illegible]古人の変[illegible]て[illegible]変性[illegible]脈[illegible]脈と[illegible]脈を[illegible]相[illegible]
[illegible]りて今日の[illegible]と脈を[illegible]
[illegible]論[illegible]脈の
[illegible]の[illegible]の故[illegible]
[illegible]脈[illegible]
[illegible]代の[illegible]
[illegible]代の[illegible]
[illegible]脈[illegible]
[illegible]人の
[illegible]
[illegible]代の[illegible]
[illegible]人の[illegible]

[illegible]
[illegible]脈[illegible]
[illegible]脈[illegible]
[illegible]脈

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
人と[illegible]
[illegible]
胸中[illegible]
[illegible]
血脈を[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

大洲の焼物

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○俳諧

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○月

只稽古のため

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○[illegible]

自讃〻論の下　出許六

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○初蝶のまこと

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○上巳　何月の句なるか梅が大津梅を手に

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

何のかの花とかいふ匂ひ

[illegible]ふ何のかの白ひかりとかいふ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

八重分ふ者ふ人〻意を入てこそ聞ふ者の一なれ
わすれ時を一日のゆめさめて六百番の歌合せをうの泊
とあるふ世をすてゝ大事ふ海に身を投ふ者
箱の御歌をも後成の卿の海ふかり長者の又宮殿の
宮ひとりをふ入けり時ふ
のつゝとものべをもうゑふ
いせ萩や　秋の深むれば月の面の
昌八萩と萩とゝ時の面の海むとをもとよみ
出ふ出ふ出ふ

なるは無為の形をとゝくとゝ
さの句可解ふい
て〳〵一天下ふ二星の意をよそ
て〳〵と云ふ句也下巻
七夕といふもの　おまと　猶雖
はたゝのやのゝ　経ひのゝ　なり　変なり　切字
こゝ入〳〵七夕やのやうの字ゝ入ぬ句也文
しふなり　仮名ふ七夕やとゝ　うゝ　作りる
おてふてゝいるもるなり　ゝ　経ひ上ふ
なり　七夕ゝ七夕のふ　句也　句也
文字ふ　ゝ　句也
ゝ句りゝ　○　題も入ゝ　集の時加賀の歌枝
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

[illegible]の句作俳諧と京猿蓑り

[illegible]

是春の句こゝかりらきの世廣く世ゝ[illegible]れか明り

の[illegible]文明月ふるやゝ姫の[illegible]ふ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]おしゝ[illegible]変なる下表り

そ[illegible]れ[illegible]ハ名[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

入ぬるかなしいかなる句ゝよりて句の句ふ川
入ふるゝ稀く人の世乃たゝのいとのうてし拙き事
之埋木よりふとの枝ふ出てゝ未女子を切字の
事ゝとゝ乃ゝ世ゝ

○第一初蟬の句ゝ題
吳ハ海ゝ世ゝ岩川ゝ世ゝ蟬の坂の句より
あゝゝと拙ゝ切ゝ出ゝ長ゝゝ乃ゝ入ゝ
にゝの句蟬ゝ題吳ゝ世ゝ奥ふ入ゝ是めゝ
題吳ゝ世ゝ拙の妙句と雜句と
おなし拙ふ出入たる事題吳ゝ世ゝ
う世の小ゝ世ゝ集ふ已へ出ゝ孫ゝ
ゝみふ奥ふ出入ゝ以の句ふ集へ
出ゝ世ゝ一ゝ句ふ出ゝ

秋来ぬと拙板州ゝ世ゝ
ゝの句雄来ぬとおゝ下ゝ
ゝ

秋来ぬと自わゝ世ゝ
音ゝ世ゝ

六百番ゝ合に
秋来ぬと俗のゝ
ゝ

ゝの二首の句ゝ
ゝゝ秋来ぬゝ下ゝ
ゝゝ文ゝ世ゝ用ゝ
ゝゝ文ゝ世ゝ下ゝ
ゝゝ人ゝ
ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

芭蕉先生の句之中に和の[illegible]耳ふるの[illegible]行る月[illegible]
の[illegible]たかたてとくとくとくとくと和と[illegible]部
の紙ふときとの通給や[illegible]の変[illegible]
作者の自撰[illegible]新[illegible]
言[illegible]
給ふ紙[illegible]
[illegible]九百九十九人[illegible]
[illegible]一人面白[illegible]
[illegible]

片服[illegible]
[illegible]

[illegible]連[illegible]芭蕉[illegible]

今[illegible]

芭蕉

芭蕉今[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]文章[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]大切[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

世有[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

暮秋とは九月の中こゝ[illegible]

八月[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

杖の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月花の一の段の後に吹うす

[illegible]曲のあるべきこと

[illegible]

萩の露中し山[illegible]

[illegible]萩の露[illegible]

上七文字の中十分の[illegible]

[illegible]

[illegible]七字[illegible]

[illegible]

[illegible]

丁抵と云ふ世に流行す

[illegible]

の罪の[illegible]

○[illegible]生の[illegible]

[illegible]時代四十五年も古[illegible]

[illegible]元日や[illegible]

[illegible]

なる文字なり三四年以来[illegible]

業とせり大[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

父母のきまりふる舞の句

[illegible]の名句なり。惟[illegible]と何の句。貴句も歳暮の
[illegible]でのことなるべし。文字[illegible]おもしろ
[illegible]。[illegible]でのこと[illegible]と思ひ[illegible]
[illegible]と[illegible]世会と其と二句述懐の[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。

千鮭

とふ句せ〜ふ大はは尚白句

千鮭

小こ言句せ〜ふ和とまつ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

松のもとの雫の句の法

乙州

北吹

冊野

○ 雫をとくとくと我身と成る世哉

△ 雫とくとくと我身と成る世哉

○ 行てみるめの小さと見

隠逸

引馬

金華と揚る雫の筆

もとゝしの筆

乙州に青きを雫とこそ行き也南蘭とこそ行

紅梅赤白梅の新時百南蘭とも梅

文章ふたゝめ新時百南蘭とも梅

梅ゝしとなるとなるとも

南蘭とも下男ゝ

きゝ中ゝ

ちとの句ゝ

句ともゝ中ゝ

句秋

ちとの句ゝ

きゝとせゝ

常盤木の

ゝ

ゝ

ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

梅[illegible]

[illegible]春の梅の句[illegible]○芳句[illegible]合[illegible]

[illegible]月の[illegible]水[illegible]

[illegible]天[illegible]芳句[illegible]

[illegible]日月[illegible]

[illegible]天[illegible]

求[illegible]天水[illegible]

[illegible]

[illegible]芳句[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人々はなはだ不思議に思ふ事なり

[illegible]

[illegible]

田の草取りおはるとて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

千鳥と云ふ[illegible]

角大師[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

句[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

下巻の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]